「人間の安全保障」を支える価値

― 映画で体感するグローバル化と人権 ―

三　輪　昭　子　（非常勤講師）

Human Security makes values;

Movies lead to Human Rights under Globalization

Shoko MIWA

要約　グローバライゼーションは，さまざまなところで人権に関わっている。特に環境の文脈で現れる地球的危機は，貧困に結びつくだけでなく，戦争・紛争にも関係してくる。本稿では，そんな現実を知らせてくれる映画素材を利用し，国連および日本政府が進めてきた「人間の安全保障」という概念を深め，その概念を支える価値なるものを探求する。そうすることで，何が私たちを脅かしているかを認識し，また，何が予防的な役割を果たしうるのかを考え，未来を拓く糧としていく。

Keywords：グローバライゼーション，環境，人間の安全保障，映画

１．はじめに

グローバライゼーションが進展している現在，国家以上に，NGOや企業の動きが注目されている。両者とも国家より機動力があり，地球という舞台でさまざまな活動が期待できるからだ。

グローバライゼーションの時代において「企業の社会的責任（Corporate Social Responsibility; CSR，以下CSR）」が求められる中にあって，国際連合は現在，世界のビジネス・リーダーに対し「より良き地球市民」[1] をめざす国連グローバル・コンパクト（Global Compact; GC，以下GC）への取り組みを呼びかけている。

GCに関する情報で，企業が世界経済の中での革新性や技術力に注目し，国連と結びつくことのメリットを伝え，また企業が更なる発展を遂げるために国連との活動を協働していくことの意義を確認している[2]。

そもそもGCは1999年１月，スイスのダボスで開かれた世界経済フォーラムの席上で，コフィー・アナン国連事務総長（当時）が提唱し，翌2000年7月にニューヨークの国連本部で正式に発足した。これまでに世界から1,000以上の企業が参画している。GCは参加する世界各国の企業に対して，それぞれの影響力の及ぶ範囲内で，人権，労働，環境の三分野で，国際的に認められた規範を支持し実践するよう求めている。

とはいえ，GCは，企業を規制する手段でも，法的に拘束力ある行動規範でもない。各企業が責任ある創造的なリーダーシップを発揮し，社会のよき一員として行動するよう促すとともに，持続可能な成長を実現するための世界的な枠組みづくりに参加する「自発的な意思」を尊重する活動である。

筆者が個人的興味でGCに注目し始めた頃，日本企業は７社しか参画を表明していなかった[3] ので，非常に残念に思った記憶がある。しかし，ここ数年のうちに社会経済におけるCSRへの認識が高まったためだろうか，2008年１月現在で58社が参画している。

本稿は，そんな企業の姿勢に注目しながらも，今後の地球社会が戦争や紛争のないことで，企業が無駄な経費を費やすことなく，持続的な発展が可能となるためのキーワードとして「人間の安全保障」について考察する。

前回は概念の理論的，制度的な部分に焦点を当てたが，今回は，その概念を支える価値なるものを探求する。その際，現状を広く知らせる力を持つメディアの力，すなわち映画を素材に取り上げ，そこから得られる情報を参考にする。

２．連鎖する課題

「半世紀ほど前，ささいな試みからアフリカの美しい湖に放たれた一匹の魚。そこから悪夢のグローバリゼーションが始まった。」[4]

日本での公開前から，すでに多くの映画賞を海外で受賞してきたためか，『ダーウィンの悪夢（Darwin's Nightmare, 2004年，フランス・オーストリア・ベルギー）』は，日本上陸前から衝撃的内容であるなどの風評とともに，ウェブ上や雑誌媒体で紹介されてきた。

確かに，上記の文章を一読すれば，とんでもない連鎖が起こっていたことを想像せざるを得ない。しかも，それは現実に存在するアフリカという地で起きているのだ。

魚はナイルパーチという大型の肉食魚のことで，大

きいものは全長２メートル，重さ100キログラムまで成長するという。そして，アフリカの美しい湖とはビクトリア湖で，世界２位の大きさを誇るだけでなく，生物多様性の宝庫であった淡水湖で，タンザニア，ケニア，ウガンダの三カ国に囲まれる[5]。

外来魚の肉食魚ナイルパーチが湖に放たれ，それが爆発的に増えた。その結果，湖畔の町では，この魚を加工・輸出する一大産業が誕生することとなり，それによって雇用が生まれ，地域経済が潤った。好ましいことである。しかし，これは表の明るい面でしかない。

その一方で，それまで湖で魚を獲って生活の糧にしていた人々の暮らしは破壊され，工場での職を求めようとする。加えて，農村など他の地域から多くの人が職を求めて湖の周辺にやってくる。そうなれば，仕事にあぶれる人も多く出てくる。現実は，それだけに終わらなかった。貧困，売春，エイズ，ストリート・チルドレン，ドラッグ，湖の環境悪化という循環サイクルが完成。その結果は明白だ。富める者と窮する者との格差拡大である。

さらに，ナイルパーチを積みにやってくる飛行機が，アフリカの紛争のための武器を運んでくるという[6]。この事実以上に驚かされるのは，ナイルパーチの代表的輸出先がＥＵと日本ということだ。日本では，外食産業や給食の白身魚のフライによく使われ，スーパーでは味噌漬け，西京漬けとして並んでいる[7]。アフリカという遠い大陸の話だからと，他人事でスクリーンを観ていると，衝撃的な事実が眼前に飛び込んでくるのだ。

前回の拙稿[8]で同様の課題テーマを扱った。その中で，「グローバライゼーションの進行する現在，相互依存度の深まりが，人々の安全ばかりでなく生存までもが，他の国や他の地域の人々の作為･不作為に依存している」と述べた。それが，私たち日本人の日常レベルで起きていたのである。その意味することは，加害者としての私たち日本人の存在である。私たちは，貧困をつくり出すことに加担していたのであった。

ところで，この映画はさまざまな社会論争を生み出したと言われている。映画が告発した憎き現象の元凶はナイルパーチだと決め付けて，フランスではナイルパーチの不買運動が行われた[9]。撮影が行われたタンザニアでは，大統領が専門調査団を組織し，映画はタンザニア水産業を色眼鏡で見ており，それが悪影響を及ぼしたと批判している[10]。しかし，これらは一面的な反応である。注目すべきは，武器輸送との関連であろう。

３．人間の安全保障とグローバライゼーション

人間の安全保障は，「コペンハーゲン宣言」の中で提出された概念である。グローバライゼーションの暗部にあって危機にさらされていると目される人々に必要なものとして，社会的苦悩，社会的不安定の主要な原因を軽減・除去していこうと組み立てられた[11]。

一般的には，「人間の生存・生活・尊厳に対する脅威への取り組みを強化しようという考え方」[12]であると紹介されている。

グローバライゼーションを考える上で例示が容易なのは，環境に関する話題である。人間の安全保障を脅かす問題として，とらえることができる。ここでは，環境に関わる文脈で人権を考え，人間の安全保障を考える上で前提となるもの，すなわち人間の安全保障を支える価値を探るきっかけとしたい。

（１）環境負荷と人権

人権は，生命・身体・財産を保障し，各人が自分なりの考えをもち，表現し，活動することを通じて，生きがいを感じる生活を確保することが究極の目的といえる。中学校社会科での公民的分野や高等学校公民科において，日本国憲法の学習過程で，人権とは，要するに各人に幸福を追求できるようにすることだと学ぶ。そのための条件として，平和であるということなしに人権を保障することはできない[13]。

この人権の条件は，通常戦争や紛争との関連で語られることが多い。しかし，平和であるためには戦争の除去以外に適えられるべきことがある。それは，人間としてふさわしい環境下で生きることである。人間にとってふさわしい環境はどんなものか。そんな質問が出そうだが，まずは環境破壊を起こさないことではないだろうか。

昨今，地球温暖化の引き起こす気候変動に注目が集まっている。ここ数年の間に世界で起きている環境災害や異常気象によって，人々の生活が脅威に晒されている。ここ数年の日本への巨大台風の襲来，海抜の低いツバル共和国での海面上昇や海水の氾濫，海面上昇の影響で水に苦しめられているイタリア・ベネチア，度重なるサイクロンで洪水に悩まされるバングラデシュなど気候変動に悩まされる事例は枚挙にいとまがない。

温暖化防止に積極的に取り組み，企業活動や個々の家庭生活でエコ活動をして二酸化炭素排出量を減少させようと努力しているようであるが，日本には構造的問題が存在しているので，それを根本的に考え直し，次善の策を出さない限り困難だと思われる。

その構造的問題は，「フード・マイレージ」という言葉に象徴される。この言葉を初めて耳にしたのは，『地球危機2008』[14]という特別番組であった。そこでの紹介は，二酸化炭素排出量と食料輸入量とに注目したものである。聞きなれない用語であったので，ポータルサイトで検索を試みた結果，農林水産政策研究所がヒットし，そこで研究されていることを知った。そ

こでの研究を，簡略に述べたい。

「フード・マイレージ」は，食料の総輸入量・距離を示す指標である。輸入食料の量及び輸送距離を総合的・定量的に把握するためのものだという。具体的には，輸入相手国別の食料輸入量に当該国からわが国までの輸送距離を乗じ，その国別の数値を累積することにより求められ，単位はt・km（トン・キロメートル）である[15]。日本の食料自給率は低く，世界の至る所から食糧を輸入している事実を考えれば，かなりの数字になると容易に想像できる。

2001年のデータを紹介しよう。わが国の食料総量は合計で約5800万トン，フード・マイレージは約9000億トン・キロメートルとなる。それを環境負荷で考えると，二酸化炭素排出量は16.9百万トンになる。

フード・マイレージでわが国と各国との比較をすると，韓国及びアメリカは日本の約３～４割，イギリス及びドイツは約２割，フランスは１割強となっている。

これらの数値を知れば，『ダーウィンの悪夢』での日本を想起してしまう。日本は地球上にある食料資源ばかりでなく，その輸送によって環境への負荷も多くかけている。換言すれば，この数値は私たちが環境災害の加害者である事実を突き立てているのである。

（2）資源争奪と人権

グローバライゼーション時代の人権は，国家を超えて，一人ひとりの人間の命と日常生活を守るという発想で考えるので，そのような戦争や紛争が起きないような予防的措置が必要である。

しかしながら，すでに資源獲得競争によってもたらされた緊張が人権侵害を起こし，それを国際社会が告発してきた。例えば，ダルフール紛争[16]は「21世紀最大の人道危機」といわれた事態であったが，資源獲得を優先してきた中国に，欧米社会が批判を浴びせたのである。石油採掘に多大な投資をし，膨大な石油輸入をスーダンに依存する中国は，スーダン政府に肩入れし，紛争解決に動かなかった[17]。

かつて欧州列強が支配権を争ったアフリカ大陸では今，資源確保を目指す中国の存在感が増している。石油はスーダンだけでなく，アンゴラ，ナイジェリアにも食指を動かしている。希少金属はコンゴで，援助や借款と引き換えに原油や鉱物資源を得る資源外交を展開している。

銅獲得を狙いとしたザンビアでは，一般市民からの反発が広がっているという[18]。その引き金は，2005年の銅山関連施設の爆発事故であった。中国系の工場で爆発がおこり，ザンビア人約50人が死亡した。中国側の安全対策を軽視した姿勢に不満が噴出したらしい。さらに，2006年，銅鉱山で労働組合への加入と待遇改善を求める従業員の抗議行動があり，鎮圧の際の発砲で死傷者を出したことも影響している。

その一方で，中国は無条件で学校，病院，道路等の建設といった援助を現地で行うので，歓迎されている側面を持つ。通常，欧米諸国が介入する場合は，人権や民主化などの政治的条件をつけて援助を行う傾向にあるからだ。

果たして，欧米諸国がするような人権や民主化などの政治的条件づけは，アフリカの人々に対して無用の長物なのだろうか。幸福追求といった人権の条件は，どうやったら提供できるのだろうか。中国のように右手で資源獲得，左手で大量虐殺を黙認するかのような態度は，内政干渉とならず，国際社会のルールを守っているかのように見える。しかし，映画『ダーウィンの悪夢』を引き合いに出さなくても，アフリカの資源を獲得（争奪）することが，いずれやってくる環境悪化につながることになり，人々を人権侵害に陥れるきっかけをつくっているように思われる。

また，アフリカに限らず世界中に資源を求め，獲得のために地球各地を駆け巡れば，先のフード・マイレージに示されたごとく環境負荷が大きくかかる。それだけでなく，開発に開発を重ねていけば環境が疲弊し，人間が生きるために必要な食料や水資源などが不足することになり，その不足によって争奪が行われ，やがては紛争や戦争の火種になる可能性がある。これに関しては後述する。

（3）紛争はつくられる

アフリカで，何百万もの死者と避難民を出した近年の紛争を資金面で支えたのは，紛争ダイヤモンドである[19]。このような事実を告発する役目を果たした映画が２本ある。

ひとつは，『ロード・オブ・ウォー　－史上最強の武器商人と呼ばれた男－（Load of War, 2005年，アメリカ）』で，武器商人と呼ばれた武器ディーラーの物語である。冷戦終結にまつわり，膨大な数の武器・兵器が，旧ソビエト連邦からアフリカをはじめとする発展途上国へ売りに出され，内戦やテロのために使われたこと，一方で，それらを売りさばいたディーラーたちが巨万の富を手にしたことを描いている。

もうひとつは，『ブラッド・ダイヤモンド（Blood Diamond, 2006年，アメリカ）』で，紛争ダイヤモンドという紛争・内戦・そして人権侵害を引き起こす資金源となっているものの存在を明らかにし，キンバリー・プロセスという紛争ダイヤモンドの取引を防ぐための国際認証制度を取り決めるまでが，描かれている。

ここでは，資源そのもの，すなわちダイヤモンドに注目し，その違法取引によって生じた数十億ドルに上る利益が，軍指導者や武装勢力によって武器購入資金となっている現実を情報として提供してくれた作品「ブラッド・ダイヤモンド」を中心に，記述する。

この映画のキャッチコピーとして，ダイヤの価値を決める「四つのC，色のColor，カットのCut，透明度のClarity，カラットのCarat」に，五つ目のC（争いのConflict）が存在することを意識させ，映画の核心に迫る。ダイヤモンドという資源は，私たちにとって日常的なものではないが，それだけに特別なとき，例えば「婚約指輪は給料３か月分の値段のダイヤの指輪を」というＣＭがテレビで放映されていたように，一生に一度の大切な贈り物という認識のあるものだ。それだけに，そのダイヤの指輪が血塗られた経緯を経て手許にやってきたのなら，せっかくの価値も半減どころか，怒りの種にすらなる。

さて，その紛争ダイヤモンドであるが，この問題が最もピークであったのは1990年代で，世界で取引されるダイヤモンドの約４％がそうであったと，ダイヤモンド業界は主張しているようである。国連での報告では，アンゴラで1996年から1997年にかけて反政府軍が年間平均7億アメリカドルを輸出していたという。これだけで市場の10％に相当する。1990年代半ばから後半にかけてアンゴラ，シエラレオネが引き起こした紛争の絶頂期には，国際貿易の15％は紛争ダイヤモンドだったと推定できる[20]。

しかも，紛争ダイヤモンドの問題は終わっていないと言われている。東アフリカのコートジボアールでは，反政府軍が支配する地域から紛争ダイヤモンドは採掘され，近隣諸国へ密輸され，国際市場に出回った。規制がまだ不十分であったらしく，2003万アメリカドルもの紛争ダイヤモンドがコートジボアールからガーナへ抜け，そこで紛争によらないダイヤモンドであると認証され，さらにマリを抜け，合法的な取引の中に入り込んだというのだ。

2003年１月より施行され，輸出入の際に，未加工のダイヤモンドには「紛争にかかわりのない」ことの証明を政府に対して求めたキンバリー・プロセス認証制度に，70カ国以上が参加している。参加国は，紛争にかかわりのない天然ダイヤモンドに対して証明書を発行すること，この認証なしの未加工のダイヤモンドを受け入れないこと，それぞれに同意している。それにもかかわらず，政府の統制力が不適切であるためか，または未加工のダイヤモンドのみを対象とする認証制度であるためか，いまだ紛争ダイヤモンドは出回っている[21]。

上記の事実にルーツをもった映画作品の話に戻ろう。映画「ブラッド・ダイヤモンド」の舞台は，1990年代の内戦下のアフリカ・シエラレオネである。隠された巨大なダイヤモンドを核に，元傭兵のダイヤ密売人，ダイヤ採掘に駆り出された漁師，ダイヤ密売の実態を追うジャーナリストが三者三様絡み合う構成となっている。

まず，注目できるのは，漁師が反政府軍の襲撃によって家族から引き離され，ダイヤモンド採掘場[22]で強制労働を強いられるばかりでなく，息子も誘拐され，強制的に子ども兵士にさせられていたところだ。

子ども兵士といえば，前稿で『イノセント･ボイス～12歳の戦場～（Innocent Voices, 2004年，メキシコ)』を紹介した。この作品は，政府軍は12歳になる少年たちを兵士として徴集するというキャッチコピーで驚かせ，その現実の過酷さに眼を閉じたくなるほどであった。1980年のエルサルバドルで，政府軍とゲリラが戦闘下にある日常を，子どもの目を通じて描かれている作品である。

シエラレオネの場合はどうか。ここでは，2002年１月に武装解除完了が宣言された。戦争は今や過去のものになったが，実際には，紛争ダイヤモンドは今日も存在する。そればかりか，ダイヤモンド採掘場は無差別に採掘されたため荒廃してしまったばかりでなく，採掘場は放棄されたため自然環境に多くの被害を与えてしまっている。この荒廃した土地を改善させて，農耕地を開墾していくことで，人々の生活を回復させていく途上に，今はある[23]。

子ども兵士の問題は，1997年に始まったコンゴ戦争によって，深刻な事態に至った。戦争は５年間続き，2003年暫定政権ができあがったものの，コンゴ民主共和国内は荒廃してしまったため，近隣諸国に避難し，難民となって他国へ流出した者も多い。

同国では，戦争が激しくなるにしたがって子ども兵士の徴集と使用が深刻化した。路上から誘拐され，逃げようとしたら殺されるか拷問を受ける。また，逃げ場所をなくすために，子どもの出身の村を襲撃し村民を殺させるようなこともしたという。このような場面を，意図的に挿入することで，映画「ブラッド・ダイヤモンド」は，子ども兵士を減らすキャンペーンとしての役割を担ったような印象も受ける。

アムネスティ・インターナショナルによれば，和平によって武装解除を国際的な支援でもって始まったが，およそ３万人と数えられる子ども兵士のうち，2006年６月までに１万9000人だけが武装解除できた[24]。

４．人間の安全保障を支える精神

「人間の安全保障を考える上で最も重要なことは，人間の自由と人間がもつ創造的で価値ある人生を生きていく豊かな可能性を確保することです。今日，貧困，環境破壊，薬物，国際犯罪組織，エイズ等感染症，紛争，難民流出，対人地雷等さまざまな問題が個人の生命・生活・尊厳に対する脅威となっています。こうした中で人間の自由と可能性を確保するためには，人間一人ひとりに注目する人間の安全保障の視点から様々な問題に取り組むことが重要となっていま

す。」[25]

人間の安全保障とは何か，という問いに対して，上記のような記述で説明がなされている。その説明文から，個人の生命・生活・尊厳に対する脅威がなくなれば，人間の自由と可能性を確保できるということだ。この文脈に従うと，人間は自由があって初めて可能性のある存在になれるということであろう。可能性は，より具体的な行動に移すことのできる力のことを示しているのではなかろうか。

では，人間の自由とは，何だろう。単純に，「自由」という言葉で連想されるのは，何らかの行動をするとき，「束縛や強制を受けないこと」と考えることはできる。しかし，それが人間の生命・生活・尊厳という対象や領域でとらえなければならないので，自由放任という言葉で補完できるような「好き勝手」の意味合いはない，としなければならない。

このようにして「自由」について言葉だけで考えるのは，非常に難しい。ここでも，映画作品を例示して考えていきたい。

（1） 監視社会の中の疑惑

「監視」は別世界の話ではない。私たちの生活の隅々に，実際は多く存在している。それは，監視カメラの存在である。コンビニをはじめとする商業施設には，必ずといって良いほど犯罪抑止のための監視カメラが設置されている。安心のために必要な措置として，その設置を許している。私たちは無意識的に監視されることを許し，その中で生活している。その監視カメラの量はかなりのもの[26]で，歩行者や住人のプライバシーが侵害されているという認識レベルは超えたという[27]。しかし，本当の意味で，私たちは監視社会を知っているのだろうか。

東西ベルリンが統一されてから17年経った現在，やっと監視国家旧東ドイツの正体がわかるようになった。中でも，その支配の中枢を担っていた組織がどういうものだったのか，具体的に，どのような活動をしていたのか，それらは，よく知られていなかった[28]。

グローバライゼーションをつくったのは，東西ドイツを隔てるベルリンの壁の崩壊であり，その後のソ連崩壊であった。東西ドイツが別々の国として存在し，社会主義体制を維持してきた旧東ドイツのことを，例えば世界史の学習で多少なりとも学んだ。そして，ソ連にゴルバチョフ政権ができ，ペレストロイカやグラスノスチというスローガンを下にした動きに伴い，社会主義各国が終焉を迎えることとなった。当時，テレビ画面を通し感動をもってベルリンの壁崩壊のニュースを耳にした記憶がある。

『善き人のためのソナタ（Das Leben Der Anderen /The Lives of Others, 2006年，ドイツ）』は，ドイツ統一へと向かう旧東ドイツの最後の５年を描いている。当時の旧東ドイツ政権では，国家への忠誠を，国民に強く求め，思想文化の統一を強めるため，西側と通じる人間を監視摘発する組織「シュタージ」をもって，強権主義を強めていた。この組織は，ナチス時代のゲシュタポと比較されるほどの監視システムで，その非情さと残忍さが語られていた。そのような状況下で，監視摘発を担当した政府の要人や，その犠牲となった当時の文化人たちが，何を考え，どう行動したのかを描いた作品と言えよう。

この作品では，三人の主人公で物語が紡がれる。東ドイツ国家（劇中では，ドイツ統一前なので，劇中のことを述べる場合は旧をつけない。）に表向き忠誠的であるが，西側の文化・演劇にも造詣が深い人気劇作家であり，演出家でもある人物と，その彼の舞台作品では必ず主役を演ずる，恋人の俳優，そして二人の演劇活動に疑惑を抱き，反体制的であることを証明するようシュタージの責任者から命じられ，盗聴を始めた大尉の三人だ。

ところで，この作品の日本語タイトルは，「善き人のためのソナタ」である。原題は「Das Leben Der Anderen」，その英語訳が「The Lives of Others」となっていて，日本語のそれは直訳ではない。このタイトルのソナタが劇中の重要なターニングポイントとなっているから，それをタイトルにもってきたのだろう。それは，人気劇作家の最も親しい友人とされた劇作家から，誕生日プレゼントとして贈られた楽譜のタイトルで，「この曲を本気で聴いた者は，悪人になれない」という言葉とともに贈られた。

その贈り主の劇作家は，すでに反体制ということで，シュタージによってあらゆる創作活動の権利を剥奪されていた。その贈り主の劇作家が，あるとき自殺し，その追悼の意味をこめて人気劇作家がピアノを弾くという場面がある。もちろん，盗聴していたシュタージの大尉はそのピアノ演奏を聴いていた。そして，その美しい旋律に涙し，自らのあり方・行動に疑念を持つようになり，そこからの行動に変化が見られるようになっていくのである。

原題について，もう少し追究しておこう。ドイツ語なら「Anderen」で，英語では「Others」となるが，これはいったい何を表しているのか。あえて，日本語訳にするのなら，「あちら側の人間」とするのがいいかもしれない。シュタージは，特定の個人というものを概念的に抹殺し，「あちら側の人間」というカテゴリーの人間を作り，尋問や監視を通じて彼らを国民の憎悪の対象に仕立てあげる。その任務は，あちら側の人間たちの生活の隅々まで入り込み，ドイツ社会主義統一党の要望に応えなくなった者たちを抜本的に変えることだと理解していた[29]。監視国家であった旧東ドイツの状況をほとんど知らない日本において，この映画を知ってもらうために，劇中で大きな意味を持つ楽

曲がタイトルになったのであろうと推測できる。

上記と内容的趣旨は違うが，もう少し，映画のタイトルに関する話を続けよう。『ナイロビの蜂（The Constant Gardener, 2005年，イギリス）』という作品がある。タイトルだけ読むと，アフリカのケニア・ナイロビに蜂が飛んでいるのかと誤解をしてしまう[30]。しかも，原題は「The Constant Gardener」であるから，さらにわかりにくい。直訳で「誠実な庭師」となるが，この作品中で「誠実な庭師」は，庭いじりの好きなイギリスの外交官を指す。その妻は女性活動家として，アフリカで大手製薬会社スリー・ビーズ・ナイロビが結核の新薬発売のために人体実験的な投薬治療を大規模に行っていることに気付き，世界に糾弾するつもりで動いていた。その製薬会社の名前がスリービーズ（BBB）だから，そのビーズをとって蜂としたと考えられる。

その妻が，劇中冒頭で，いきなり死体となって発見され，その死に疑問を持った夫である外交官が，真意を求めて自ら行動を起こすといった展開となっている。そこで，外交官はケニアへと向かうのであるが，そのケニアの自然や，貧困などの問題の存在を伺わせる場面が出てくるので，いまだアフリカは欧米列強に利用されているのだなと考えられるようになっている。しかし，映画そのものには，「世界中が絶賛し涙した，壮大なラブストーリー」というコピーで宣伝されたため，違う文脈で紹介されてしまっていた。

『善き人のためのソナタ』の話に戻ろう。この作品中に見出されるのは，旧東ドイツの監視国家としての現実である。実際に監視対象となった二人の生活を四六時中盗聴し，監視する様子，それは人間関係を引き裂き，分断させ，相互不信へと追いやってしまう理不尽な支配・被支配の様子である。また，シュタージ博物館なるものが存在し，そこに監視報告書であるシュタージ・ファイルが保管されていて，それを閲覧することができるということだ。そのファイルには密告者や尋問者の署名があり，意外な人物からの情報まで取られていたのがわかるようだ。

上記の歴史的遺産ばかりでなく，作品内で主人公の一人であるシュタージの大尉が，監視対象の生活の盗聴を通してその任務に疑問を感じ，その遂行をサポタージュすることで自らは降格になり，社会主義の敵になってしまうのだが，そういう中ででも，人間の尊厳が保たれたことに拍手喝采を送りたくなる。人間の尊厳を奪われかねない恐怖の中で，人間の良心のあり方をも考えさせてくれる作品となっているのだ。

（2） 人道支援という仮面

2001年９月11日のアメリカ同時多発テロの発生によって一挙に高まった不安は，対テロ戦争[31]というカードを切りやすくしてしまった。その結果，アフガニスタン侵攻からイラク戦争へと軍事的対応が進められた。その増大する暴力と混乱が収束へ向かうかもしれない中で，日本では，自衛隊派遣を巡り復興支援という言葉とともに，人道支援という言葉もまた，何度となくメディアに踊った。さらに，対テロ戦争が繰り広げられることで，不安感を醸成する根本的な原因から世界の注意を遠ざけてしまった。

そんな折，『ホテル・ルワンダ（Hotel Rwanda, 2004年，イギリス，イタリア，南アフリカ）』という1994年にルワンダで起こった大量虐殺事件をテーマとする作品がやっと日本で公開されるようになった[32]。

長年にわたるルワンダのツチ族とフツ族の争いから起きた，100万人を越える大虐殺事件に素材をとった作品で，当時1200人を超えるツチ族と穏健フツ族の難民を匿い，虐殺から救ったベルギー系ホテルの支配人夫妻の活躍を，ドキュメンタリー風に再現したものである。大虐殺事件の発端は，フツ族出身の大統領の飛行機墜落死で，それはフツ族の自作自演であった。それをツチ族がやったものとラジオ放送を使って喧伝したために，ツチ族と穏健フツ族を皆殺しにするといった大虐殺となった。

しかし，この作品は，この虐殺自体を前面に置いたものではなく，結果的に難民たちをホテルに匿う中で，出入りする報道関係者たちが持ち寄る情報や映像，国連平和維持軍の動き，ひいてはその無能振りを描写することで，国際社会における先進国の態度などを白日の下に晒したのである。

例えば，カメラマンが虐殺の映像を撮影した後，「ニュースでそれを流しても誰も助けに来ないよ，みんな『怖いね』って言うだけ」という台詞にどきりとさせられる。それだけでなく，国連平和維持軍は，ベルギー系在留ヨーロッパ人の安全を図ることに腐心し，ルワンダ人はどうなってもいいような言い草をする。「われわれは仲裁しない」とか，「虐殺には介入しない」という責任回避的な台詞が目立つのだ。

そんな時，現地の情勢を正確に把握し，現地人が本当に望む平和に向かって，的確な判断と行動をとっていくことが，いかに困難であるのか。人道支援という言葉は簡単に口に出せても，それを行動に移しがたい現状は，いったい何が原因となっているのか，考えさせられる。

同じルワンダの虐殺事件を扱った作品が，もうひとつある。『ホテル・ルワンダ』の後発として，一年後に公開された。この『ルワンダの涙（Shooting Dogs, 2005年，イギリス，ドイツ）』は，大虐殺の渦中にツチ族を救出するために尽力し殺害される白人神父の軌跡を追ったものである。この作品は，『ホテル・ルワンダ』以上に，生々しい虐殺の描写や，常駐している国連平和維持軍の平和維持活動は平和をつくるものではないことを示す場面が登場する。

それ以上に，考えさせられたのは，メディア側の人間の発言であった。それは，BBCの報道記者のものだ。すなわち，「ボスニアでは涙が乾く暇なく流れた。ここでは事情はもっと酷いけど，死ぬのはアフリカ人だから，それほど同情はできない。」つまり，白人ならば，白人の自分に近づけて考えたり，感じたりできるけど，黒人のアフリカ人は，全くの他人事であるということだ。ここでも，人道主義は言葉上では簡単である。しかし，BBCの報道記者が発した「シンパシィ（sympathy）」，つまり思いやり，共感，共鳴ができてこそ，人道的な活動へと動くことができるように思われるのだ。

５．ノーベル平和賞の原点

2007年のノーベル平和賞受賞者は，注目に値した。地球温暖化防止への貢献で，アル・ゴア前米国副大統領と気候変動に関する政府間パネル（IPPC）に贈られたのだ。

環境分野での貢献に初めて平和賞が贈られたのは，2004年である。アフリカの森林保護に努めたケニア人女性，ワンガリ・マータイだった。しかしながら，その受賞に異議を唱える人がいた。軍事紛争，内戦，テロなどで不安が広がる時代に，国際条約調印の功労者となった人物ではなく，植林で知られている人物に与えることは，ノーベル平和賞の趣旨に合わないというのである[33]。

ノーベル賞を創設したアルフレッド・ノーベルは遺書の中で，その対象者を「軍備の削減や廃絶，和平会議の開催，推進に最も貢献した人」と定義した。だが，この1世紀で平和を脅かす対立概念は，大国間の戦争から内戦，人権侵害などへ変化した。平和賞選考委員会は，創設100周年の2001年，対象分野を見直し，紛争の根源にも眼を向けるようになったのである。2006年のバングラデシュのユヌスは，貧困撲滅に取り組んだ。2007年のアル・ゴアやIPPCの受賞は，その流れである[34]。

アル・ゴアは地球温暖化がおよぼす影響を，説得力ある科学的証拠を用いて，人類史上最大の災害になりかねない事態を何とかしようと考え，さまざまな場所でマルチメディアを駆使したプレゼンテーションを行った。それがドキュメンタリーとして結実したのが，『不都合な真実（An Inconvenient Truth; A Global Warning. 2006年，アメリカ）』である。

気候変動による砂漠化，旱魃の進行は農業，食糧生産に悪影響を及ぼし，それによる難民の発生が領土争いを招き，紛争の種になるという考え方を，アル・ゴアはノーベル平和賞の授賞式での受賞演説で指摘した。ノーベル平和賞の選考委員会の委員長は，「現代世界における目標は広い意味での『人間の安全保障』だ」と訴えた。2007年４月の国連安全保障理事会で，潘基文国連事務総長は「気候変動は環境，社会，経済だけでなく，平和，安全保障問題にも影響を与える」と指摘した[35]。

また，インドネシア・バリ島で開かれた国連気候変動枠組み条約の第13回締約国会議の会場でも，気候変動枠組み条約のデ・ブア事務局長が，平和と温暖化の関連について，以下のことを強調して指摘した。すなわち，「気候変動で最も深刻なのは飲み水の問題だ。IPCCは2020年までにアフリカで水不足に悩まされる人々が最大２億５千万人に増加すると予測。こうした水難民がスペインから欧州へ大量に押し寄せたらどうなるか。温暖化対策は紛争防止にほかならない。」

環境悪化は平和に対する脅威とする考え方は，定着しつつある[36]。

６．終わりに

2007年の８月，アメリカで「The eleventh Hour（2007年，アメリカ）」という環境保護をテーマとした作品が公開された[37]。アメリカのアカデミー賞の授賞式に，トヨタのハイブリッドカー，プリウスに乗って受賞会場に到着するなど，かねてからエコロジストとして知られている俳優レオナルド・ディカプリオが，これをプロデュースし，自らナレーターとして参加している。それだけでなく，彼は自ら監修したエコサイトをウェブ上で開設し，この映画について紹介するとともに，環境保全のためのアクションをいかに起こすかを，提案している[38]。

このような映像メディアは，地球温暖化防止という平和づくりの必要性を訴え，地球上に住む多くの人々が危機にあることを知らせてくれている。そして，いずれ環境協力を行うことで，資源の乱開発，生態系の劣化が引き金となる武力紛争を阻止することができるだろうことを，望まずにはいられない。さらに，映画による警告の数々は，私たちの足元は危機的状況にあるが，改善の余地が十分あるのだという気にさせる。そして，持続可能な開発を推し進め，平和を創設することが期待されている。

おそらく，映画が問いかけ，教えてくれるものは，世界についての現状認識と，期待される今後の努力であろう。そのために，グローバライゼーションのもたらすものについて学習を積み重ね，今こそ課題を課題として認め，解決へと一歩を踏み出さなければならない。そのために，情報として何を選択し，いかに決定するか。この力を養うことは大切である。それに関わるものとして，今回は「人間の安全保障」を支える価値としてとらえ，それが人間のもつ自由と可能性であることを考察してきた。そこには尊厳，良心，人道という精神性に期待される部分が大きい。それらは言葉

以上に，映像による体感が可能であることに注目し，環境協力に結びつくような価値観，視点，共鳴，共感へと広げて，未来を拓いていくことになるだろう。

人間の自由と可能性でもって創造した映画，それこそが，私たちの未来の力なのである。

脚注

1　宮本光雄「グローバル教育と人間尊重の精神」，『グローバル教育の理論と実践』，2007年，教育開発研究所，p60参照。これによれば，地球市民は，地球民主主義の確立を志向し，自分の立っている足場である地域と地球を機軸として考え，判断し，行動し，地域や地球に責任のとれる人間を意味している。

2　「グローバル・コンパクト」国連広報資料センター http://www.unic.or.jp/globalcomp/news/070110.htm（アクセス日2008年１月７日）によれば，潘基文国連事務総長は，2007年１月10日に開かれたニューヨークの経済界の集まりで演説を行い，グローバル・コンパクトを国連と民間企業とのかかわりの中心となすものという考えを示した。

3　2002年６月現在の統計。

4　映画公開前に配布されたチラシ裏面，及び『ダーウィンの悪夢』パンフレット，2006年12月，p４参照。

5　「『ダーウィンの悪夢』の背景」『ダーウィンの悪夢』パンフレット，2006年12月，p22参照。

6　「Director's Note」『ダーウィンの悪夢』パンフレット，2006年12月，p10参照。それによると，監督が制作するに至ったきっかけが語られている。当初，コンゴ暴動渦中のルワンダ難民を追跡したドキュメンタリー作品のためのリサーチ中に出会って，親しくなったロシア人パイロットとの会話の中に信じがたい事実があった。それは，コンゴに運んでいるのは人道支援だけのものではなかった。彼らパイロットは，戦争に必要なものなら何でも運んでいるということだった。

7　「『ダーウィンの悪夢』の背景」前掲書，p23参照。

8　拙稿「映画が問いかける『人間の安全保障』―グローバライゼーションと人権―」『教養と教育』第７号，2007年３月，p77-85，参照。

9　前掲書，p４参照。

10　「タンザニア大統領を激怒させたドキュメンタリー映画」『クーリエ・ジャポン』2006年12月21日号，講談社，p75参照。

11　拙稿「映画が問いかける『人間の安全保障』―グローバライゼーションと人権―」『教養と教育』第７号，2007年３月，p78参照。

12　パンフレット『人間の安全保障―21世紀を人間中心の世紀とするために』参照。なお，配布は終わっているので現物を参照できないが，外務省ＨＰ内にpdfファイルがあるので，それを参照できる。http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/pub/pamph/human.html（アクセス日2008年１月７日）

13　初宿正典，高橋正俊，米沢広一，棟居快行『いちばんやさしい　憲法入門　第三版』，有斐閣，2005年，p142参照。

14　テレビ朝日開局50周年記念特別番組として，2008年１月４日放映された。

15　中田哲也「食料の総輸入量・距離（フード・マイレージ）とその環境に及ぼす負荷に関する考察」，『農林水産政策研究所レビュー　No.11』2004年３月。因みに，各論説は下記HPからpdfで原稿が取れる。http://www.primaff.affrc.go.jp/seika/primaffreview/11-index.html（アクセス日2008年１月５日）

16　人権擁護団体として著名なNGOアムネスティ・インターナショナルによる国際ニュースでは，スーダンの背景として，次の情報を提供している。すなわち，イギリス統治時代にアラブ系人口の多い北部とアフリカ系人口の多い南部の分離政策が取られ，1955年に南北間で紛争が勃発。その後1983年に内戦が再燃したが，2005年に和平合意が成立し暫定政権が樹立された。その一方で，スーダン西部のダルフールで，スーダン政府・アラブ遊牧系民兵と反政府勢力との間の紛争が2003年から激化し，一般市民に深刻な打撃を与えた。2005年３月，悪化するスーダンの人権状況に対し，国連安保理はスーダン政府に対する制裁措置を導入した。

また，国連統計によると，ダルフール紛争勃発以来，民間人を中心に20万人以上が死亡，およそ250万人が国内避難民になっている。

17　「中華の波濤５　人権より国益」石川保典著，中日新聞2008年１月７日朝刊

18　「中華の波濤１　資源獲得」池田千晶著，中日新聞2008年１月１日朝刊

19　『紛争ダイヤモンドアクション』アムネスティ・インターナショナルHP http://www.amnesty.or.jp/modules/wfsection/article.php?articleid=959（アクセス日2008年１月４日）

20　「紛争ダイヤモンドについてのQ＆A」紛争ダイヤモンドアクション」アムネスティ・インターナショナルHP http://www.amnesty.or.jp/modules/wfsection/article.php?articleid=994（アクセス日2008年１月４日）

21　前掲HP。

22　「The Story of Blood Diamond　DIAZ 100%

Conflict Freeキャンペーン」『DIAZ－ファイン・ジュエリー』http://diaz.jp/?mode=f5（アクセス日2008年１月４日）によると，シエラレオネの男性や子供たちは，かがみ込んで，川の泥水に膝まで浸かりながら働き，ダイヤモンド鉱山での１日のきつい労働に対してたったの８円しか手にしていない。それでも彼らは，「自分たちの夢のダイヤモンド」が見つかることを期待しながら毎日鉱山の現場に戻っていき，「自分たちの夢のダイヤモンド」，つまり学校に行って勉強し，家族や果ては村までをも助けることができるほどの大きな石を夢見て過酷な労働に携わっているのである。さらに，シエラレオネには，1930年代からダイヤモンドが採掘されているコイドゥという鉱山町がある。ここでの生活では，電気も電話線もない。ひとりの男性の平均賃金は年間約25,000円で，平均寿命は39歳というデータがある。

23　前掲HP。

24「紛争ダイヤモンド：子ども兵士」『アムネスティ・インターナショナル・ジャパン』HP参照。http://www.amnesty.or.jp/modules/wfsection/article.php?articleid=961（アクセス日2008年１月８日）

25　パンフレット『人間の安全保障―21世紀を人間中心の世紀とするために』参照。

26　斎藤貴男『安心のファシズム』，岩波新書，2004年，ｐ119－120参照。これによれば，監視カメラは警察が直接運用しているものだけでなく，それ以外のものも含めるとかなりの設置台数になる。

27　前掲書，ｐ122－127参照。ここには，みずほフィナンシャルグループの富士総合研究所による監視カメラに関する意識調査をした結果についての記述がある。これによれば，人々は取り立てて疑問を抱くことのないまま，監視カメラをほとんど無条件で受け入れる姿勢を示していた。

28　春江一也氏の著作『プラハの春』や『ベルリンの秋』には，執拗に監視対象を追い詰めていく様子が描かれている。在チェコスロバキア大使館，在東ドイツ大使館，在ベルリン総領事館に勤務中，自らの体験したことを下敷きにフィクション小説を執筆した。すでに，2000年に定年退官している。

29　『善き人のためのソナタ』DVD付録の特製ブックレット，アルバトロス株式会社，2007年。

30　原作も，同じタイトルで発刊されている。著者はジョン・ル・カレで，スパイ小説でよく知られている。

31　クリストファー・フレイヴィン編著，エコ・フォーラム21世紀監修『ワールドウォッチ研究所地球白書2005－06』，家の光協会，2005年，ｐ29参照。対テロ戦争を人権侵害の隠れ蓑とする国も存在する。対テロが大義になってしまい，重大な人権侵害を行っている国や地域に武器と軍事援助を供給することで，人権は危機に晒される。

32　「ホテル・ルワンダの日本公開を求める会」http://rwanda.hp.infoseek.co.jp/（アクセス日2008年１月７日）によると，トロント映画祭では観客賞を受賞，昨年度のアカデミー賞では主要３部門にノミネートを果たすなど，各方面で並々ならぬ注目を集めている作品に，日本では国内配給会社による買い手がつかず，お蔵入りの状況をやむなくされていた。その後，会が発足し，署名運動を実施することで，その実現にこぎつけた。

33　クリストファー・フレイヴィン編著，エコ・フォーラム21世紀監修『ワールドウォッチ研究所地球白書2005－06』，家の光協会，2005年。Pviii参照。ここで，さらに確認するように，ワンガリ・マータイほどノーベル平和賞にふさわしい人物はいないとしている。彼女が進めてきた，貧しい女性を組織化して，数百万もの木を植える目的はケニアのやせ細る森を生き返らせ，切実に求められていた調理用燃料を提供し，女性とその家族の生活向上に，女性たち自身を積極的に関与させることだったと，ワールドウォッチ研究所の所長は記述している。

34　池田千晶・蒲敏哉「核心　ノーベル平和賞授賞式；環境悪化　紛争の源」，中日新聞朝刊，2007年12月11日

35　前掲記事，参照。

36　前掲記事，参照。

37　リンカーン・センター映画協会2007年８月上映プログラム「Film Society of Lincoln Center；August 2007」で，グリーン・スクリーンとして環境ドキュメンタリー映画を紹介している。当時，渡米中であった筆者は，この作品を鑑賞する機会に恵まれた。作品は，環境に関わる様々な分野の専門家にインタヴューをすることで，人類が今後の世界をどのように変えていけるかを探求したものと言える。

38　「Leonardo DiCaprio Eco-site」http://www.leonardodicaprio.org/index.html（アクセス日2008年１月20日）